



筑紫女学園大学リポジット

A Study of Ryu Sogen : On his Poems written at Eishu and Ryushu, Places where he was Exiled for Relegation

メタデータ	言語: jpn
	出版者:
	公開日: 2017-02-22
	キーワード (Ja):
	キーワード (En):
	作成者: 松崎, 治之, MATSUZAKI, Haruyuki
	メールアドレス:
URL	所属:
	https://chikushi-u.repo.nii.ac.jp/records/723

柳宗元小論

——貶地の永州・柳州での詩をめぐって——

松崎 治之

A Study of Ryu Sogen

——On his Poems written at Eishu and Ryushu,

Places where he was Exiled for Relegation——

Haruyuki MATSUZAKI

一、

唐王朝第六代玄宗^{げんそう}（七一二―七五六）の天宝十四載^{さい}（七五五）に勃発^{はつぱつ}し、第八代代宗^{だいそう}（七六二―七七九）の広徳元年（七六三）に終わった“安史の乱”の後^{のち}、唐朝の政治はとみに衰え^{おとろ}え、秩序は混乱し、外には節度使（藩鎮）の専横、内には宦官の跋扈があり、農村は極度に疲弊し、穀物の値^ねはあがり、第九代徳宗（七八〇―八〇五）は、建中元年（七八〇）に両税法によって国家財政のたてなおしを計ったが、節度使の反乱討伐のための軍費は巨額にのぼり、財政は依然として窮乏をつづけた。

その節度使について具現すると、河北三鎮（幽州・成徳・魏博）と河南二鎮（淄青・淮西）の勢力が顕著で、なかでも淮西の節度使李希烈の強暴さはひどく、その討伐に徳宗は諸方の節度使の兵を募^つったが、それに応じて涇原

節度使の兵が、西から長安に入ったものの、朝廷の待遇がわるいということで、これがまた暴動を起こし、もとの涇原節度使朱泚しゅせいというものを頭領として建中四年（七八三）に叛そむいた。ついに徳宗は長安西北の奉天にこれを避さけたが、朱泚はみずから皇帝と称し、国号を漢と称して長安を領有した。

翌よく、興元元年（七八四）、徳宗は陸贄りくしのすすめによつて、自分の不徳を詫わびる詔みことりを發布するといふ腑甲斐ない情況であつた。

同年（七八四）六月、李晟の助力でやつと長安を回復し、朱泚は敗死して、徳宗は長安に還かえつた。

一方、淮西の李希烈も貞元二年（七八六）に、部下の陳仙奇に殺され、その陳が淮西節度使になると、今度は呉少誠が、その陳を殺すというふうになつて、その勝手次第な暴逆ぶりには、朝廷も全く手がつかず、のちに第十一代憲宗（八〇六―八二〇）の時になつて、呉少誠の子の呉元済が淮西節度使としてなお叛逆をつづけていたのを討伐して、ついに成功するまで、どうにも手の下しようがなかつた。

また、貞元二年（七八六）には吐蕃とばん（チベット）の入寇もあり、まことに不安な時代であつた。こうした不穩ふおんな世相が、人心を享樂的にさせると同時に、仏教や道教の信仰、ことに密教のような現世利益を求める宗教を盛んにした。これに乗じて寺院は王侯貴族と共に土地兼併につとめて飽あくことがなかつた。その煽あおりを受けて農民は多く流民となつて、その王侯や寺院の領地に收容されていったことは、史書に詳しく見られるところである。

さらに、乱後、長安には回紇かいこつ（ウイグル）人がおびただしく来ていたが、当時の長安の人心の不安と頽廢は、虚無的・享樂的な傾向を助長し、それが異國趣味のマニアを生みだしていた觀さえあつた。

ちなみに、陳鴻ちんこうの『東城老父伝』（『太平広記』卷四八五所収）に、——「今、北胡、京師ト雜処シ、妻ヲ娶めとリ、子ヲ生ム。長安中ノ少年胡心アリ。吾子首飾ぶししゆしよくいふく韓服ノ制ヲ見ヨ。前ト同ジカラズ。物妖ニ非あらザルヲ得えンヤ」と、言つてゐるのが、その証あかしである。

つまり、朝権は衰微し、政治は乱れ、奢侈を極めるものがあれば、一方では生活苦にあえぐ人々もいる。そして若者は異国の風にそまって、中国の伝統精神を失っていったというのである。

はたまた、こういう時、世の中の矛盾、弊害を除き、再び正しい世に返そうと努力するのが、士大夫・読書人等の良心でもあった。

そこで、こうした現実社会の混乱と矛盾を直視して、弱者のために切実な声をあげた先駆けの詩人が杜甫（七一二―七七〇）であり、元結（七二三―七七二）であった。

とにかく、デカダンな世にあって、士大夫・読書人がたちあがるのは、勢いの自然であり、それが文学の改革運動というようなものになって現われるのも自明の理であつたろう。その一つが韓愈・柳宗元等の古文復興運動であり、今一つが、元稹・白居易の諷諭詩の運動である。

貞元二十一年（八〇五）正月、徳宗が崩じ、第十代順宗が即位した。王伾・王叔文一党は、徳宗の晩年、かねてよしみを通じていた順宗が即位すると、朝政の革新を計り、宦官のにぎっていた兵権を奪い、これを天子に返そうと計るなど、計画するところがあつたが、そのやり方が陰謀に類したので、当時の元老や元勳を始め、多くの人々の恨みを買った。首謀の王伾は右散騎常侍、王叔文は戸部侍郎度支塩鉄転運使にその位はすぎなかったが、宰相の韋軌宜をだきこんで画策したのである。

柳宗元（七七三―八一九）・劉禹錫（七七二―八四二）も、この一派に加わり、柳は礼部員外郎、劉は度支員外郎となり、これもその位はまだ低いが、新進気鋭の彼らの行動は、当時の人々もその名をいうのをはばかったという程の威勢であつた。

ところが、順宗は病のため八月九日、位を太子に譲り、貞元二十一年（八〇五）をもって永貞元年とし、翌年正月崩じた。

ここに即位した第十一代の憲宗（八〇六―八二〇）は、順宗の長子で二十七歳、少壮の気をもって政治の刷新をめざし、まず武元衡を用いて御史中丞とし、王叔文一党を貶逐し、王伾を開州司馬、王叔文を渝州司戸とし、韋執宜を崖州司馬に流し、ついでその一党をそれぞれ左遷した。なかでも柳宗元を劄州刺史、劉禹錫を連州刺史に流したが、その罪が、なおこれでは軽すぎるということで、改めて柳は永州司馬に、劉は朗州司馬に流された。この柳・劉二人ともに、この後十年、貶地から還されず、のちに元和十年（八一五）に一旦長安にもどされるが、すぐにまた出され、今度は柳は柳州刺史に、劉は連州刺史に左遷された。

そして柳宗元は、ついにその配所（柳州の地）で死ぬことになった。柳宗元といえば、古文復興を唱えた韓愈（七六八―八二四）と併称される散文作家である。とはいふものの、その詩風は韓愈やその門下とは異質で、王維（六九一―七五九）・孟浩然（六六九―七四〇）・韋応物（七三七―？）と併せて「王・孟・韋・柳」の称があるように、自然詩人の系列にも加えられている。

この柳宗元をはじめ、一群の若手官僚たちは、英明という評判の高かった皇太子（順宗李誦）に期待を寄せ、その力で政治を改革しようという志をいだいていた。

したがって、混乱した政治の改革、刷新をモットーとしたこの一派の決起には、時代の動向に対して、それなりに必然性があったと思われるが、果たしてそれほど非難すべきものがあつたのだろうか。

俗にこの事件は、指導者が王伾と王叔文の二人であつたので、「二王の変」といったり、はたまた、この時、改革の中心であつた柳宗元・劉禹錫等、八人の若手官僚が南方の辺境へ、司馬として左遷されたので、これを「八司馬の変」といったりしている。

この事件を総括すると、中国の歴史では、長いこと順宗の信任を乱用した小人たちが政治を乱したと見られてきたが、現代では唐王朝の矛盾を斬新的に解決しようとして挫折したもので、彼らの運動の目標や政策は正当であつ

たと評価されている。

ひきつづき宰相暗殺という不穏な世上であつた元和十年（八一五）、八司馬のうち五人が左遷された土地に十年間放置されていたが、政府の中にも転任させてもよからうという者がいて、長安へ召還された。

しかしながら、反改革の勢力はやはり強硬に反対し、結局、司馬時代よりいっそう遠方の刺史とされ、形式的には昇任であるが、実質はいっそう苛酷な処分となつた。その中で、柳宗元は柳州（広西壮族自治区の柳州市）に着任した。

ところが、柳宗元は刺史として州政の実権をにぎることができたのに奮起して、「ここが政治をやるのにあたいたくない土地であろうか」などと、いってこの南方の未開の地で理想的な政治の実現に没頭したのである。

具体的には、この未開の地では、人身を負債の抵当にし、返済できないと奴隷にする習慣があつたが、それに手立てを考へて多くの奴隷を解放し、付近の諸州もこれにならい、一年間に救われた者が千人以上にも及んだということである。

また、みずから教育にあたり、南方の中国で科挙に受験する者は、皆、かれを師として崇敬たという。

ところが、亜熱帯の風土の中でのこうした過度の仕事による疲労は、健康をそこね柳州にあること四年、四十七歳で病没したのである。

柳州の人々は、かれの遺徳をしのんで廟を建て、神として祭りつづけたといわれる。

思うに、唐から宋にかけて、華南地方は流刑地の覬があつて、多くの士大夫が左遷の憂き目にあっている。韓愈・柳宗元・劉禹錫・白居易・蘇軾等はその代表例と思われる。

一面、これらの士大夫は不運ではあつたが、未開の華南の中国化と中国文化の普及は大きく推進されたという見方もある。

これらの士大夫の中で、柳宗元の政治家として、経世済民の信条を実践した生き方は、純粹で一本氣ともいえるもので、韓愈・白居易のような俗臭が希薄なだけに、その鋭敏な神経は流謫の境遇と風土にさいなまれ、病氣が命取りになった。

今回は、この柳宗元の貶地^{へんち}である永州（湖南省零陵県）・柳州（広西壮族自治区柳州市）での詩を媒介として、その人間像をかいまみたいと思っている。

二、

流謫地^{りゅうたくち}での詩について論述する前に、柳宗元の生涯について、『旧唐書』卷一六〇・『新唐書』卷一六八などの「柳宗元伝」および『韓昌黎文集』第三十二卷の「柳子厚墓誌銘」などを資料として、概略、披露しておこう。

「柳宗元（七七三―八一九）。本籍は唐の河東（山西省永濟県）の人。しかし、生まれは長安（陝西省西安）であった。字は子厚。河東出身ということで柳河東、または河東先生と呼ばれ、最後の官名によって柳柳州とも呼ばれている。徳宗の貞元九年（七九三）進士に及第。貞元十二年（七九六）秘書省校書郎となり、貞元十四年（七九八）には博学宏詞科にも及第、集賢殿正字に任ぜられた。その後、藍田（陝西省藍田県）の尉を経て、貞元十九年（八〇三）、監察御史裏行に就任。皇太子李誦（後の順宗）のもとで政治の刷新を図る^{はか}王伾・王叔文らの党派に加わった。

貞元二十一年（八〇五）、順宗の即位とともに礼部員外郎に任ぜられたが、王叔文らの急進的な改革は宦官や旧勢力の反発にあつて挫折。在位わずか七ヶ月で順宗が退位し、憲宗が即位して永貞と改元されると、柳宗元も邵州（湖南省宝慶県）の刺史に左遷され、さらに赴任の途中に詔が下つて、永州（湖南省零陵県）の司馬に貶^{おと}された。元和

十年（八一五）、許されて一旦長安に召還されたが、ほどなくいつそう遠隔の柳州（広西壮族自治区柳州市）の刺史に左遷され、元和十四年（八一九）その地で没した。享年四十七歳。

かれは古文復興運動の代表として韓愈と並び称されて、唐宋八大家にも数えられ、文集や「唐宋八家文」を通じて、その作品も広範に普及し、文学史上における不動の盛名は周知の事実である。

また、十数年間の南方流謫の生活から生み出された遊記のうち、「永州八記」をはじめとする山水のそれは、景と情との渾然たる境地を示し、さらに、治者として人民生活に対処する視座からの「捕蛇者説」や「梓人伝」などは、注目すべき新風と大きな意義を持っている。

はたまた、境遇の関係からであろうが、屈原（前三四三―前二七七？戦国時代の楚の人）への傾倒が顕著であり、他方、陶淵明（三六五？―四二七、南朝東晋の詩人）の流れをくみ、自然を詠ずる詩にも、清澄な山水の描写の中に、辺境におけるやり場のない悲憤と深い孤独感を浮き彫りにした独自の境地をうたいあげているといった具合で、その作風は多彩である。

総じて、かれの作品（主に散文）は、客観的・合理的な観点から対象を把握するといった手法で、終始一貫しているところが印象深い。

三、

それでは、永州（湖南省零陵県）に流されていた時の「南礪中題（南礪中ニテ題ス）」と、いう五言古詩から鑑賞し論じることとしよう。

秋氣集南礪　　秋氣　　南礪二集マル

獨遊亭午時

ひとりあそびていごとき
獨り遊ぶ亭午ノ時

廻風一蕭瑟

かいふういつしやうしつ
廻風一ニ蕭瑟

林景久參差

りんけいひき
林景久シク參差

始至若有得

はじめていた
始メテ至ツテ得ル有ルガ若ク、

稍深遂忘疲

ややふか
稍深クシテ遂ニ疲レヲ忘ル

羈禽響幽谷

ききんゆうこく
羈禽幽谷ニ響キ

寒藻舞淪漪

かんそうりんい
寒藻淪漪ニ舞ウ

去國魂已遠

くにさ
國ヲ去ツテ魂已ニ遠ク

懷人淚空垂

ひとおも
人ヲ懷ウテ淚空シク垂ル

孤生易爲感

こせいかな
孤生感ヲ為シ易ク

失路少所宜

しつろよろ
失路宜シキ所少ナシ

索莫竟何事

さくばくついに
索莫竟ニ何事ゾ

徘徊祇自知

はいかいただみず
徘徊祇ダ自カラ知ル

誰爲後來者

たれこうらいもの
誰カ後來ノ者ト為リテ

當與此心期

まさこころ
當ニ此ノ心ト期スベキ

永州でも早い時期に、南の溪川を散策しながら、この詩は作ったのであろう。

秋とは無縁でありそうなこの南国の溪谷に、秋のけはいが集まって、秋色の深い中、真昼時、わたしはただひとり、
気ままに歩きまわる。

耳にするものは、さびしく吹きわたる秋風の音、目にするものは、ふぞろいに揺れ動く林の姿。

この冒頭の四句は、古来、秋をうたう詩に用いられてきた。『楚辞』九弁の「悲シキ哉、秋ノ氣タルヤ蕭瑟トシテ草木ハ揺落シ変衰ス」を典故としたものであろう。

さて、この溪谷に來た時から、何か心にせまるものがあるように感じたが、しだいに深く分け入るにつれて、身の疲れも忘れてしまった。この疲れを忘れさせるものは何か。それは溪谷の風景が心をいやすからではなくて、思いに心を致すからである。

この部分は、叙景詩に普遍に見られる景物が心をなごませて、疲れをいやす効用とは異質のもので、心を痛ませるものにとらわれているものの深刻さによるものであるという。

次に、耳には奥深い溪谷にひびくはぐれ鳥の啼き声がきこえ、目には寒々とした水面で水草が波にゆれ動く姿が映る。

この羈禽と寒藻の存在は、柳宗元自身の存在と重ね合わさるものである。しかも羈禽と寒藻の二句は、詩全体のモチーフをイメージ化して示したものともいえる。

羈禽ともいべき自分（柳宗元）は、故郷長安を去って魂を遠隔の地にさまよわせ、親しかった人々を思い出しでは、涙を流すばかりである。このはぐれ鳥のイメージに託された孤独感の筆致は絶妙である。

一方、孤独な生活は、とかくものを感じやすくなる。さらに、行くべき道を失った身には、何事もうまくいかない。そしてこの不安定な人生の描写は、水面にただよう水草のイメージからくるものである。

孤独感・不安定感は結局、失意のわびしい心しか生まない。このうらぶれはてたわが身を一体どうしたらよいというのだ。あてもなくさまよい歩くしかないこの気持ちを知っているのは自分だけなのだ。

誰か将来、この地を訪れて、今のこのわたしの心と同じ思いをする人があるであろうか。

この点について、柳宗元は独自に溪川を見つけた喜びを描いた『永州八記』の「石澗の記」の中でも、——「古

ノ人、其レ此ニ樂ム有ルカ。後ノ来ル者、能ク余ノ踐履ヲ追フコト有ランヤ」といつているが、畢竟、期待できそうにない未来の者にしか思いをやりようのない深い孤独と寂寥の中に身をおいて、永州の自然と向かいあっていたのである。

ところで、この詩にみられる自然観を裏付けるものが、「わたしは罪人となって、この永州に住むこととなつてから、常に憂い恐れていた」という文句ではじまる『永州八記』の第一篇「始得西山宴游記（始テ西山ヲ得テ宴游スルノ記）」の冒頭の文に見られる。

それは、こうである。

「余僇人ト為ツテ是ノ州ニ居リシヨリ、恒ニ惴惴タリ。其ノ隙ニハ、則チ施施トシテ行キ、漫漫トシテ游ブ。日々ニ其ノ徒ト、高山ニ上リ、深山ニ入リ、迴溪ヲ窮ム。幽泉怪石、遠シトシテ到ラザル無シ。到レバ即チ草ヲ披イテ坐シ、壺ヲ傾ケテ酔フ。酔ヘバ即チ更々相枕シテ以テ臥ス。意ニ極ル所有レバ、夢モ亦タ趣ヲ同ウス。覺メテ起キ、起キテ歸ル。以為ラク凡ソ是ノ州ノ山、異態有ル者ハ皆我が有ナリト。而シテ未ダ始ヨリ西山ノ怪特ヲ知ラザルナリ。……觴ヲ引イテ滿酌シ、頽然トシテ酔ニ就キ、日ノ入ルヲ知ラズ。蒼然タル暮色、遠クヨリシテ至ル。見ル所無キニ至ツテ、猶ホ歸ルヲ欲セズ。心凝リ形釋ケテ、萬化ト冥合ス。然ル後ニ吾ガ嚮ノ未ダ始ヨリ游バズ、游ブコト是ニ於テ始マルコトヲ知ル。故ニ之ガ文ヲ為リテ以テ志ス。是ノ歳元和四年（八〇九）ナリ」と。

一見、実に明快な告白である。溪川の奥まで行き、行きつけば、草を推し披いて坐り、壺を傾けて酒に酔う。酔うと互いに重なり枕し合つて臥る。覚めて起き、起きて帰る。わたしはこの州の山で、変わった姿のものは、皆自分の持ちものであると思うが、しかし西山の怪しくすぐれた景色は、始めからまだ知らなかった。

これは貶地にあつても、罪に対する恐れと不安がつきまとつていたので、暇あるごとに山水に遊んだのであろう。あるいは酒に酔いしれて、うさをはらし、恐れと不安からの逃避と忘却を意図するものであつたかもしれない。

したがって、宴游の真意も、そこらにあつて、まだ自然と一体になつてとか、自然を楽しむというようなものはなかった。

それでは、柳宗元が心底にある孤独・寂寥たる心境をぬけだして永州の自然に愉快にとけこみ、それを詩文に昇華させるには、どれほどの時間を要したであらうか。結局、真の意味では、脱することができなかったのではないかと思われてならぬ。

『永州八記』（山水遊記）の中でも傑作といわれる第二篇の「鈇鋸潭の記」では、この景物に堪能して、しばし故郷（長安）を忘れさせてくれたと、いつているがそれはこうである。

「鈇鋸潭ハ西山ノ西ニ在リ、其ノ始メハ蓋シ冉水南ヨリ奔注シ、山石ニ抵リテ屈折シテ東流ス。其ノ典委ノ勢ヒ峻ク、盪撃益々暴ニシテ、其ノ涯ヲ齧ム。故ニ旁廣クシテ中深ク、畢ク石ニ至リテ乃チ止ム。流沫輪ヲ成シテ、然ル後ニ徐行ス。其ノ清クシテ平ラカナル者、且二十畝ナラントス。樹有リテ環リ、泉有リテ懸カル。

其ノ上ニ居ル者有リ。予ノ亟々游ブラ以テヤ、一旦門ヲ款キテ来タリ告ゲテ曰ク、『官祖私券ノ委積ニ勝ヘズ、既ニ山ヲ芟リテ居ラ更ム。願ハクハ潭上ノ田ヲ以テ財ニ貿ヘ、以テ禍ヲ緩ウセン』ト。予樂シミテ其ノ言ノ如クス。即チ其ノ臺ヲ崇クシ、其ノ檻ヲ延キ、其ノ泉ヲ高キ者ニ行リテ、之ヲ潭ニ墜セバ、聲有リテ濔然タリ。尤モ中秋月ヲ觀ル與ニ宜シト爲ス。於ニ以テ天ノ高ク、氣ノ迴ナルヲ見ル。

執力予ヲシテ夷ニ居ルヲ樂シミテ故土ヲ忘レシムル者ゾ。茲ノ潭ニ非ザルヤ」と。

鈇鋸潭（ひのしのこと。火熨の形に似た潭）がどうしてできたか、その情景はどうか、ということを実に要領よく手短かに述べることで書き出され、後半では鈇鋸潭のほとりの土地を、思いがけず手に入れることができたことが述べられている。それも税金が高いために土地を手ばさなければならぬのでと、言いに来た人の話からである。

政治批判の巧妙な作品「種樹郭橐駝伝」・「捕蛇者説」・「送薛存義之任序」などに見られる反骨精神にあふれた柳宗元のことであるから、話がどう発展するか、一寸緊張し興味がわいたが、この文では税金の話は政治批判には進展せず、男の話は単に土地を入手した理由のみに終わる。

入手した鉛鋤潭に臨んだ土地を遊覧の場所にふさわしいように手入れをし、自然を眺めて楽しむ喜びをほしいままにするという。それは異郷に左遷された憂いを忘れさせ、故郷を懐かしむ気持ちを忘れさせるものであった。

だがしかし、その裏にはやはり、自分は今異郷に左遷されているのだ。その中で、故郷（長安での政治のこと）の懐かしさを一刻も忘れることはできないのだという気持ちがこめられているかに感じられてならぬ。というのは、この永州の地を「夷」――すなわち野蛮人の地と呼んでいることが、その証である。畢竟するに、この地は税は高く役人は横暴で、まるで夷であるという発想である。

だから、自分を慰めてくれるものは、ただ「茲ノ潭」だけなのだ、という心情であろう。

したがって、総じておだやかな鉛鋤潭の景観の話のように見えて、実は柳宗元の心底には異郷での政治に対して、冷めた目というか、それが払拭できず、不安や不満の情念を消去させることはできなかったということである。

ところで、柳宗元は、永州の冉溪と呼ばれる溪谷のほとりに土地を買って住みついたといわれるが、『冉溪』と題する七言古詩には、その時の政治に対する信条と生き方が、明示されている。それはこうである。

少時陳力希公侯 しょうじちから 少時力ヲ陳ベテ公侯タラント希ウモ

許國不復爲身謀 ゆるくに 国ニ許シテヨリ復タビハ身ノ為ニ謀ラズ

風波一跌逝萬里 ひと 風波ニ一タビ跌キテ万里ニ逝キ

壯心瓦解空縲囚 そうしんがかい 壯心瓦解シテ空シク縲囚タリ

縲囚終老無餘事

縲囚ニテ老イテ終ウ余事無カラシ

願卜湘西冉溪地

願ワクハ湘西ノ冉溪ノ地ニトシ

却學壽張樊敬侯

却ツテ學バン寿張ノ樊敬侯ノ

種漆南園待成器

漆ヲ南園ニ種エ待チテ器ヲ成セシヲ

要約すると、この詩は旺盛であつた政治的志向が崩壊して、縲囚（とらわれびと）となつた現在の自己を見すえて、壮心を抱いていた過去と、静居を願う現在とが対比されている。

若き柳宗元の夢は、自分の能力を発揮して公侯の地位につくことであつたが、それは単なる立身出世のそれではなく、身を捨てて国家のために尽くすという理想主義の燃焼であつた。

しかしながら、その革新運動は保守のまきかえしにあつて瓦解した。結果、罪人として配所にあるが、このまま晩年を送るしかない。願わくはこれからの余生を湘水の西のこの冉溪の地で静かに暮したい。

漢の樊敬侯は南園に梓と漆を植えた。人々はそれを嘲笑したが、年月をへて両木は器物を作るのに役立った。

わたしも、それにならつて漆でも植えるでしょう。これは柳宗元の生き方を暗示したもので、風評と無縁に生きようという決心と、静かに身を修め時を待つ意向とがないまざつたそれであろう。

世に絶望して隠逸の人になりたいというのは異質なものである。ここに儒者柳宗元の真骨頂が見られる。

一方、永州での自然に対する憧れや羨望は並ではない。これはかれの理想的な世界には、ほど遠い現実に対する失望の裏返し的心情と思われる。

そして、人生の理想の姿に対する、かれのあこがれが具体的にイメージ化されたのが、『漁翁』という七言古詩に結晶したものと思われる。それはこうである。

漁翁夜傍西巖宿

漁翁夜西巖ニ傍ウテ宿シ

曉汲清湘然楚竹

あかつき せいしやう ぐく 二清湘ヲ汲ンデ楚竹ヲ然ク

煙銷日出不見人

もやき えひつ 日出デテ人ヲ見ズ

欸乃一聲山水綠

あいだい いっせい 欸乃一聲山水緑ナリ

廻看天際下中流

てんさい 廻看シテ中流ヲ下レバ

巖上無心雲相逐

がんじやう むしんくも あ 巖上無心雲相イ逐ウ

漁夫のおやじは、西岸のもとで一夜を過ごし、夜あけに清らかな湘水の水をくみ、楚竹をもやす。

朝もやが晴れ、日が昇ってくる、もうその姿は見えず、^{しよく}「えいおう」と舟をこぐかけ声が響くと、山も川も緑一色。

空の果てをふりかえりながら、川の中ほどをこぎ下れば、岩の上には無心に雲が追いかけてつこをしている。

自然のふところに抱かれ、自然そのものになりきったような漁翁の生活の断面を叙景詩の形で詠みあげた詩であり、そしてそこに人生の理想像に対する作者のあこがれの心情が吐露されているといった展開である。

夜あけ、炊事、緑一色の山水の中、舟をこいでゆく漁翁の姿、全く客観的な視座による描写で、四句目の「欸乃一声、山水緑ナリ」の絶唱によって、詩はすでに完結している。

というのは、前四句と後の二句は調子を異にしているからである。

ところが、後の二句は漁翁の眼を通してとらえられた描写に変化している。このことは、作者柳宗元と漁翁が一体となり、作者は漁翁が自然と一体になっていたその眼と心境を自分のものとすることができたことを意味するものである。

ことに六句目は、東晋の陶淵明の『帰去来辞』中の「雲ハ無心ニシテ以テ岫ヲ出デ、鳥ハ飛ブニ倦ミテ還ルヲ知ル」の句をふまえていることはあきらかである。

だとすれば、そこには生きとし生ける者は、皆、自然の秩序に従って生きるべきだという感情がある。

それだけに、この無心の雲の姿は、左遷の失意をいやそうとする柳宗元にとって、強烈な心象であったのである。

結局、前四句と後の二句も自然との一体が、人生の理想の姿であるというモチーフを反復してうたいあげたものである。

だがしかし、柳宗元も今やそうした自然との一体の心境を会得したことを明示したものであろうか。

これは、実際は、自然と一体となることへの願望を吐露したものと思われてならぬ。

ここで永州の作品でもあつて、古来五言絶句の名作として人口に膾炙かいしやされている『江雪』について論述しておこう。

千山鳥飛絶 せんざんとりと 千山鳥飛ブコト絶エ

萬徑人蹤滅 ばんけいじんしょうめつ 万径人蹤滅ス

孤舟簑笠翁 こしゅうさりゆう 孤舟簑笠ノ翁

獨釣寒江雪 ひとりつ かんこう 独り釣ル寒江ノ雪

どの山からも鳥の飛ぶ姿が消え、どの小道にも人の足跡あしあとは見られない。一いっそうの小舟に、みのと笠かさをつけた老人がただ独りひと、寒々とした川で釣り糸を垂れている。

「雪」という字を一字も使わず一面の雪景色を描き出し、白一色の美しさと物音一つしない静けさと、俗世を完全に脱け出した老人とが一体となった世界である。

詩中の独り小舟を浮かべて釣り糸を垂れている老人は、孤独のきわみともいえるべき姿であるし、また、老いた一

人の漁夫りようしといったイメージでもある。

さらに、釣りをすることは古来中国では、隱遁者のイメージが附随しているのである。

したがって、この詩中の老人も世捨て人や隱者のように見なされ、『江雪』といえは超俗孤高の心境をうたいあげた傑作として賞美されてきたのである。

しかしながら、この詩に作者の左遷の境遇を重ねて考えてみると、全く違った受けとめ方となる。

具体的には、生あるものの姿が全くない凍てつくような寒江は、作者柳宗元をとりまく絶望的な現実の比喻で、「独り釣ル」とか「簑笠ノ翁」は、孤独に耐えて生き抜こうとする作者自身の姿を象徴するものと理解することができる。

柳宗元は『楚辞』を愛し、騷体（屈原の離騷のうれいにならった文体）の文も著わしているくらいであるから、貶地永州で政治改革の望みも消え、憂愁の中にある時、『楚辞』中の「漁父の辞」での屈原と漁父（隱者）の対話を連想したにちがいない。

「祖国楚をすくい、民をすくい、みずからの信ずる道を固執して煩悶する屈原に対して、漁父は世の中が濁らば、あなたも濁ればいい、みずから潔癖にとらわれて苦しい思いをすることはないではないか、とすすめるが屈原はきこうとはしないので、ついに漁父は船べりをたたいて歌いながら去っていった」という。——これまた、世を逃れ、世に隠れた者の生き方であった。

しかしながら、柳宗元には、この自由不羈な生き方をする漁父に対して、一種の憧憬はいだいていても、その清濁あわせのむといった柔軟な強靱さはなかった。してみると、簑笠の翁に作者を重ねれば、厳しい孤独感が一篇のモチーフとならざるを得なかったわけである。

とはいえ、この老人（翁）はひとり敢然と我が道を行くといった意志の力をも感じさせる。そしてそれは種々の

迫害をはねのける作者の清冽で孤独な心象風景ともいえる。

含蓄の深さが中国古典詩の特色であって、それは短詩型の作品ほど端的に示される。

二十字で一つの完結した世界を構成しているこの詩こそ、それであって一幅の水墨画といった感じでもある。

だがしかし、墨絵のように淡々とした情景でありながら、その情景に深奥しんおうなものを表象しているところに留意すべきであろう。

かさねて具現すると、白銀の世界の中での自然の詠かたじ方にしても、単なる叙景にとどまらず、その中に一人の老人を挿入そうにゅうすることで、作者はみずからの深層心理をにじませているが、しかもその両者が渾然こんぜんととけあっている。そこは、寂しいといえば寂しい、寒冷がきびしいといえばきびしい。そういう孤独の世界である。そしてそればかりもなおさず、作者が身をおいている境遇でもあった。だとすれば、銀世界の中で、ひとり釣り糸を垂れる老人の姿こそ、作者自身の心象風景であるとしかしいようがない。

勿論、かれが中央政界で順調に出世し、生涯、陽ひの当あたる所だけ歩いていたら、こういう詩興をそそることはなかったであろう。

永州の司馬に左遷された境遇にあって、楚王に追放され、汨羅べきらに身を投なげて自殺した屈原（前三四三―前二七七？）の信条に傾倒していたかれであつたればこそ、自己の心象風景として老人の姿を描いていることが、正鵠せいこくを射いたものとしていつそう味わい深く鑑賞できるのである。

それでは、追放、左遷という同じ境遇の中で屈原は自殺し、柳宗元は病歿した。どこが違うのか。―無論、生きた時代相の違いはあろうが、屈原は自我というかその意志が強烈で、自己主張の度合も並なみのものではなく、妥協がなかっただけに孤独感や緊張状態も深刻であつたのであろう。

一方、柳宗元は簞笠の翁のイメージが暗示しているように、まだ静かに孤独に向きあうことによって、その失意

と孤独に耐えられる強靱な精神はあったが、病魔に打ち勝つことはできなかった。そこには中央政界への未練というか、復帰欲が心情に底流していたというべきかもしれない。

四、

元和十年（八一五）正月、柳宗元は一旦長安に召還されたが、ほどなく永州より更に南方の柳州（広西壮族自治区柳州市）に刺史として左遷されることになった。時に、友人の劉禹錫（七七二―八四二）が、老母があるにもかかわらず播州（貴州省遵義県）の刺史に任ぜられたのを憐れみ、任地の交換を願ひ出た。朝廷では劉の任地をかえて連州（広東省連県）の刺史とし、柳宗元はそのまま柳州へ赴任させた。これは、柳宗元の友情の厚さを示すエピソードとして有名である。

こうして柳州へ着任したのは、同じ元和十年（八一五）の六月のことであつた。以来、元和十四年（八一九）十一月八日に亡くなるまで、四年間の在任であつた。

では、その柳州での生活は如何なものであつたのだろうか。『柳河東集』に、「柳州二月榕樹葉落盡偶題（柳州二月、榕樹ノ葉落チ尽クス、偶々題ス）」という七言絶句があるので、まず検討の資としよう。

宦情羈思共悽悽

宦情羈思共二悽悽タリ

春半如秋意轉迷

春半バニシテ秋ノ如ク意転タ迷ウ

山城過雨百花盡

山城雨過ギテ百花尽キ

榕葉滿庭鶯亂啼

榕葉庭ニ満チ鶯乱レ啼ク

役人暮しの窮屈な思い、異郷に流寓するわが思い、どちらもわびしい限りだ。いま春の半ばというのに、まるで

もう秋のようなけはいで、いよいよ気持ちがおちつかぬ。

山あいの町を雨がとおりすぎて、もろもろの花も散りつくした。庭には榕樹（くわ科の常緑樹・あこう。）の葉がいちめんに散りしき、鶯があちこちで鳴いている。

なじみのない南方の気候、風物に気持ちがちが落ちつかぬのもさもありなんと思われる。

そのうえ役人暮しの窮屈な思い、異郷に流寓する愁い、どちらもわびしい限りで悲しみはつのるばかりという。

「南州ノ溽暑^{じやくしよ}酔^よヒテ酒^{さけ}ノ如^{ごと}シ」という南蛮の地、柳州は柳宗元にとつていよいよ奈落の底に突き落とされた感慨ではなかったか。

こうした煩悶の心情をさらに具体的に明示した詩をもう一つ紹介しよう。

それは「登柳州城樓寄漳汀封連四州（柳州ノ城樓ニ登リテ漳汀封連四州ニ寄ス）」という七言律詩であつて、柳宗元が同じ嶺南の地、漳州（福建省漳州市）・汀州（福建省長汀県）・封州（広東省封川県）・連州（広東省連県）など四州の刺史になつていた同志の人々を思いやつてうたつた詩である。

城上高樓接大荒

海天愁思正茫茫

驚風亂颭芙蓉水

密雨斜侵薜荔牆

嶺樹重遮千里目

江流曲似九廻腸

共來百越文身地

猶自音書滯一鄉

城上ノ高樓ハ大荒ニ接シ

海天ノ愁思ハ正ニ茫茫

驚風亂レ颭ス 芙蓉ノ水

密雨斜メニ侵ス 薜荔ノ牆

嶺樹重ナツテ千里ノ目ヲ遮リ

江流曲ツテ九廻ノ腸ニ似タリ

共ニ來ル百越文身ノ地

猶才自カラ音書ハ一鄉ニ滯ル

柳州城の高楼は、遠く未開の地の果てまでつづいてゐる。そして僻遠へきえんの地に流された愁うれいは、果てはしなく広がつてゆく。

ふいにおこつた風が蓮池はすいけの水を乱みだし動かし、降りしきる雨が蔦つたの這はう牆かきねに斜ななめめに吹きつける。

嶺みねの樹木は重なつて、千里のかなたを見はるかすわたしの目を遮さえぎり、川の流れは曲まがりくねつて、わが九転のはらわたにも似てゐるではないか。

みな一緒ともにこの断髪文身の地に来ていながら、相互たよの便りは、それぞれの任地にとどこおつて通じない始末だ。

当時の人々には、「百越文身」の柳州は、野蠻ひづんめい（非文明）の地と意識されていたわけであるが、それにしても、ここに描かれた光景は荒涼こうりようたるそれである。

風が吹き、雨が降りしきる中での果てしなく広がる荒地。その果てしない荒地のように左遷されたかれの憂愁も「茫々」として果てしないという。

しかも、嶺樹にさえぎられ友人の任地や長安などは望むべくもない。

江流までが、憤怒で痛むわが九転の賜のように曲がりくねつて流れている。

こうした光景は、柳宗元の政治的行動とそれにもとづく失意の深さが生んだ心象風景としかいいようがないが、このような荒涼たる叙景に宿やどるかれの心情は、並なみのものではなく、悲惨をきわめるものではなかつたかと思われる。こうしたかれの心情を考える時、ひとしお哀れ深いものを覚える

畢竟、柳州でのかれは、中央に復帰する日をひたすら望みながら、望郷の念に駆かられること、これまたひとしおのものがあつたであろう。

その情感を立証するような、五絶と七絶の二首を紹介し、検討の資としよう。

まず、五絶の「登柳州蛾山（柳州ノ蛾山がざんニ登ルのぼ）」は、こうである。

荒山秋日午

荒山秋日午ナリ

獨上意悠悠

獨り上りテ意悠悠タリ

如何望郷處

如何ゾ郷ヲ望ム處

西北是融州

西北ハ是レ融州

秋の日のまひる時、独りこの荒れはてた山に登れば、思ひはとおく果てもない。ここからせめて故郷（長安）の方を見渡そうと思つたのに、どうしたことだ、故郷の西北の方角には故郷は見えず、見えるのは融州（柳州の北方三十里にあり、広西壮族自治区の融安。）の山々ばかり。

「意悠悠タリ」という情感があつただけに、目をさえぎる融州の山々が憎らしかつたであらう。

次に、七絶の詩は、「與浩初上人同看山寄京華親故（浩初上人ト同ニ山ヲ看テ京華ノ親故ニ寄ス）」という題であるが、なんといつても転・結句の表象は奇抜であり、そこに見られる情感の深さとあいまって絶妙の筆致である。

海畔尖山似劍鉞

海畔ノ尖山劍鉞ニ似タリ

秋來處處割愁腸

秋來処処愁腸ヲ割ク

若爲化得身千億

若為ンゾ化シテ身ノ千億ナルヲ得テ

散上峯頭望故郷

散ジテ峰頭ニ上リテ故郷ヲ望マン

海辺のとがった山々は、まるで劍のきつききで、秋ともなればどこへ行つてもその劍のきつききが、愁いにみちたわたしの腸をきりきざむために襲いかかってくる。

何とかして、わたしは自分の体を千億にも分身させて、それぞれがああ無数の山の上に散らばってなつかしい故郷をながめたいものだ。

元来、柳州は山の中であるから、海畔というのはそぐわない。しかし、古来中国は海を世界の果ての奇っ怪なと

ころと意識していて、国土の周辺地域、なかんずくその東方や南方は海に近くて、その影響下にある地域と考えられていた。

したがって、この海畔というのもそういう意味での海に近い辺境の地ということであろう。

尖山^{せんざん}は、頂上のがったごつごつした山のことで、広西壮族自治区一帯は石灰岩地帯で、現在、観光地として人氣を集めている桂林の山々を連想すれば「劍鉞^{けんぼう}ニ似^にタリ」がイメージできよう。

普通であれば、目を楽しませる奇岩怪石が左遷という不遇さの中で、かれには「愁腸ヲ割^きク」ように感じられ、精神的圧迫の対象物と化していたのである。

とすれば、「若^い為^かンゾ化^かシテ身ノ千億ナルヲ得^えテ、……故郷ヲ望^{のぞ}マン」という奇抜な発想にもとづく願望は、望郷の念の強烈さが恐怖をとまなう尖山のイメージとあいまって、おのずとうみだされたといえるかもしれない。とにかく、こうした柳州という未開地の異様な風土が、鋭敏なかれの神経をさいなみ、ついに死をもたらしたといつても過言^{かごん}ではなからう。

起・承句で、とぎすまされたかれの感覚に反映した奇岩怪石の山々の姿を、劍鉞^{けんぼう}（劍のきつさき）と詠じ、「愁腸ヲ割^きク」などと表白^{ひょうはく}したのは異常な迫力があるが、心象風景としても的確と思われる。

ここで、柳宗元の中央の政治に対する未練と、それゆえの望郷の念とは果たしてどういふものであったか。どうしてそういう思いが深かったのか。

要するに、かれの政治に対する信条とパーソナリティーは、如何^{いか}なるものであったかということでもあるが、ふれておこう。

それでは、『柳宗元伝』の一つである韓愈（七六八―八二四）の「柳子厚墓誌銘」に記載されている人柄の描写か

ら引用し、資としよう。

「子厚ハ前時少年ニシテ、人ヲ為クルニ勇ニシテ、自ラ貴重顧藉セズ、功業ハ立チドコロニ就ル可シト謂エリ、故ニ坐シテ廢退ス。既ニ退キテ、又相知ノ氣力有リテ位ヲ得シ者ノ推挽スル無シ、故ニ卒ニ窮裔ニ死シテ、材ハ世ノ用ヲ為サズ、道ハ時ニ行ワレザルナリ」と。

柳宗元は、若い頃は人を助けることに勇みたち、自分自身を重んじ惜しむということには無頓着で、功績などというものはおのずと出来あがるものと考えていた。だから罪に問われて中央から追い出されたのである。しかも追い出されてからは、俠氣があり地位もある友人が、かれを引き立ててくれるということもなかった。だからとうとう地の果てで死ぬことになり、才能は世間の役に立たず、理想も当時は実践されなかったのであるという。

この韓愈のセオリーは、当時の風潮であろうか。純粹で正義感が強く、人助けに夢中になり、一途に新世界の実現をモットーにしていたために、自己の行為をかえりみるものがなかったことが、かえってあだになり罪人として追放されたのだというが、これは柳州で刺史として借財の肩代わりとして奴隷になっていた男女を解放した事象のことを一考する時、韓愈の見解はドグマチックと思われる。

「人ヲ為クルニ勇ニシテ、自ラ貴重顧藉セズ、功業ハ立チドコロニ就ル可シト謂エリ」というのは柳宗元の為政者として、一本気な性格と見るのは短絡的思考であろうか。

そうすると、前述しているような経世済民の実践をモットーとする政治家の模範のような柳宗元像を韓愈自身が「墓誌銘」中に記載しているエピソードは、どう考え把握したらいいのであろうか。

ここで柳宗元自身が、五律の詩でもって済民、恩化に対する関心のほどを暗示している件について披露しておこう。

勿論、柳州での作品であるが、かれのものとしては珍しく、暗い影がない。

題は、「種柳戲題（柳ヲ種エテ戲レニ題ス）」という詩である。

柳州柳刺史

柳州ノ柳刺史

種柳柳江邊

柳ヲ種ウ柳江ノ辺リ

談笑爲故事

談笑故事ト爲リ

推移成昔年

推移昔年ト成ル

垂陰當覆地

陰ヲ垂レテ當ニ地ヲ覆ウベシ

聳幹會參天

幹ヲ聳エサセテ會ニ天ニ參ルベシ

好作思人樹

好シ 人ヲ思ウ樹ト作ルモ

慚無惠化傳

慚ズラクハ惠化ノ伝ウルナキヲ

表題の「戲レニ題ス」のとおり、諧謔的なタッチで詠じられている。

柳州の柳長官

柳を植えるのは、柳江のほとり、

愉快な語りあいもやがて過去の物語となり、

時とともに移り変わって、昔のこととなってしまおう

柳は枝を垂らして、きつと地面をおおうだろうし、

幹もそびえさせて、きつと天にもとどくだろう

故人（柳宗元のこと）を偲ぶ樹となってくれとよいが、

恥ずかしいのは、人民をいつくしんだといい伝えられそうにないことだ。

尾聯の「思人樹（人ヲ思ウ樹）」は、『詩經』国風・召南篇の甘棠やまなしを典故とするもので、周の召公が村々を視察した時、人民に迷惑をかけまいと甘棠やまなしの木の下で野宿した。村人はそうした召公の徳を偲しのびその甘棠の木を大切にしたりという故事をふまえている。―普通、「甘棠の愛」といって、召公の故事から転じて善政を行った人に対する尊敬と親愛の情の深いことに例えられる。

この詩では、「慚はズラクハ恵けい化かノ伝つたウルナキヲ」と謙遜しているが、それはかれが政治家として常に人民に視線を向けていたことからくる良心の発露であらう。

とにかく、未開の地、柳州で政治的理想の実現にはげみ、果てに具体的には借財の肩代わりとなった男女の奴隸を解放し、付近の諸州もその感化によって、一年に救われた者が千人以上にも及んだというが、これはまさに召公の甘棠の故事を、地じで行いったものといえよう。

ここで、柳宗元の政治家や役人に対する視座について論述しておこう。

この点については、「送薛存義之任序（薛存義ノ任ニ之クラ送ルノ序）」の文が、分明に示唆しきしている。

具現すると、転任してゆく同郷河東の薛存義を送る宴を開くという出だしから、話は自然に役人として守るべき道は何かという論に入ってゆき、現代（唐代）のすたれた役人道を指摘あてした後に、薛存義への激励のことばで結ぶという、きわめてスムーズな流れをもった構成である。

そして論の中心は、何故なぜ、役人は存在するかとか、その正道は何かについて述べる。

ところが現代、その正道を行っている役人は少なく、職権を利用して私腹をこやしているという。

畢竟するに、柳宗元の役人観は―役人は人民のための公僕こうぼくであり、人民が税を出して雇やとっているのだから、人民のために尽くすべきもので、まちがっても人民をこき使う権力を持っているなどと考えるはいけないということである。

これは別に柳宗元独自の考えではなく、古今東西を通じての真理であろう。とはいっても、だれにでもあてはまる明白な真理が行われていないというところに、役人の救いようのない腐敗墮落があるという。

これは儒家の民本主義の思想であろうが、かれの憤怒は当然そこに向けられている。

思うに、柳宗元の時代から一千年以上経過した現代の各国社会でも全く同じ現象が見られるところに、かれの識見のたしかさと、この序文の普遍性がある。

五、

総じて、柳宗元は王・孟・韋・柳と並称され、自然詩人といわれながらも、他の三者とは異質な詩境であるのが印象深い。

永州・柳州に流され、その貶地で死亡したという境遇も、その大きな原因であろう。

というのは、自然詩とはいえ、いずれの詩にも政治家としての自負、あるいは政治への未練をたちきることのできないところからくる憂愁に閉ざされた心情の吐露がみられるということである。

その点については、第二の屈原（前三四三―前二七七？戦国の楚の人）といった観も否めない。

そのうえ、具体的には詩の表現法が逆説的な告白という形式をとっているところに、さらなるユニークさがある。そのティピカルなものが永州時代の『溪居』という五言律詩であろう。

久爲簪組束 久シク簪組ニ束セラレシガ

幸此南夷謫 此ノ南夷ノ謫ヲ幸イトス

閒依農圃鄰 間ニ農圃ノ隣ニ依リ

偶似山林客

偶々山林ノ客ニ似タリ

曉耕翻露草

曉耕露草ヲ翻シ

夜榜響溪石

夜榜溪石ニ響ク

來往不逢人

來往人ニ逢ハズ

長歌楚天碧

長歌スレバ 楚天碧ナリ

わたしは長いこと役人生活に束縛されていたが、この南方の蛮夷の地に流されたことを、かえって幸運と考えている。静かに農民と隣りあわせに住み、左遷された身でありながら隠者になったような気分でもある。朝早く朝露の草地をすきかえし、夜は舟をこぐ音を谷川の岩にひびかせる。

行きつもどりつしても、人にあうことはない。声を長く引いて歌えば、ここ楚の国の空は深いみどりの色一色である。

劈頭第一に、藍田県の尉・監察御史裏行などを歴任した約七年間、中央の官途についていたことを「久シク……」といい、それに対して貶地永州での十年間の不幸を「幸イトス」というふうには、柳宗元は逆説的手法（反対の心情表現）で訴えているのである。思うに、これは「永州八記」の中にもしばしば見られる自己の信念と苦悩とを逆説的にのべている口吻とも軌を一にしている。

同じく五律の「夏ノ初メ雨後愚溪ヲ尋ヌ」の頷聯「沈吟亦タ何事ゾ、寂寞固ヨリ欲スル所ナリ」という詩句では、首聯、頷聯の閑適の心情が本心でないという屈折した心境が吐露されるといった具合に、その逆説（故意の反対）表現はかれの常套的な技法であつたようだ。

さらに換言すれば、かれの詩には自然（風花雪月）そのものの繊細な美感を詠じたものが稀少で、山水や奇岩怪石は心を慰めるといふ表現は見られるが、終極では憂愁や苦悶の心情をこまかに訴えたものとなっている。

最後に、中唐時代は政治的な軋轢あつれきがくり返された時期で、事に座ざして流され配所の月を眺めることとなった士大夫（詩文家）が多かったことも事実である。

同じ時代の韓愈や白居易も、その体験者である。ところが、白居易にいたっては「司馬ハ仍な才老おいヲ送ルノ官かん為たり、心泰こころやすク身寧みやすキハ、是レ歸きスル処ところ、故郷、何なんゾ独ひとリ長安ノミニ在あランヤ」という心情である。

表面的にせよ、左遷の感懷を幸福感で語れるのは、白居易の楽天的な性格と俗物的ともいえる精神の柔軟な強韌さにあろうが、これが柳宗元にはない。

とにかく、不幸を幸しあわせと逆説的にしかいえない屈折的な心情を持つところに、まだ鋭敏な神経と一途な純粹さが見られ、あくまで政治家としての矜持きやうぢをひめていたところに剛直といわれる強さがあつたが、脆もろさも同居していたといえる。

結論として、再度整理すると、

まず柳宗元の描く自然詩は、その美に魅了させる自然物として存在するのではなく、かれの流謫の憂愁を忘れさせる対象物にすぎなかったということである。

同じく「永州八記」でも、詳細に自然の存在やその様相が描かれてはいるが、その美しさにふれた感動の描写ではない。言いかえるとそれは名勝の地を訪ねる行為を通して、流謫の憂いを忘却したいという目的意識のもとに描出されたものと理解される。

一般に、自然詩人は自然と一体となり得たえ歡喜を絶妙にうたいあげるものであるが、柳宗元の場合、その一体の境地へのあこがれが七言古詩の『漁翁』の結びの句に見られる。

それは「天際てんさいヲ迴看かいかんシテ中流くたヲ下レバ、巖上がんじょう無心ニ雲相逐あいおウ」である。これは明らかに、自然と一体になり得た東晋の陶淵明（三六五―四二七）の境地にあこがれている心境であつて、政争にあけくれた政界を逃のがれて自然に没

入することができる現在（貶地の永州）の自分の姿を、眼前に現われては消えて行つた漁翁の姿の中に見い出しているのである。

畢竟、柳宗元は漁翁への羨望、憧憬から漁翁その人を自分自身の分身として意識し、かれと漁翁と自然との三者が一体となることを願つた境地の段階であつたと思われる。

はたまた、詩中の自然物がかれの心象風景として、妙味を発揮していることが作詩技法の特徴でもある。そのことを証明している五律の『早梅』という詩を紹介して、かれの自然物に対する本音を推考しよう。

早梅發高樹

早梅 高樹に發キ

迴映楚天碧

迴カニ楚天ノ碧ニ映ズ

朔吹飄夜香

朔吹夜香ヲ飄シ

繁霜滋曉白

繁霜曉白ヲ滋ス

欲爲萬里贈

万里ノ贈ヲ為サント欲スルモ

杳杳山水隔

杳杳トシテ山水隔ツ

寒英坐銷落

寒英坐口ニ銷落ス

何用慰遠客

何ヲ用テカ遠客ヲ慰メン

頷聯の昨夜、北風が吹いて梅花の香りがただよい、明けがた一面に降りた霜のために花の白さが一段ときわだつという。この凜冽たる寒気を侵して咲く梅の花はいうまでもなく柳宗元の孤高な精神の表象であろう。それが尾聯では、その寒中に咲いた梅の花が、今にも空しく散ろうとしている。それでは遠く左遷されているわたしは、一体どのようにしてわが心を慰めたらよいのであろうかという。

これは梅花が「坐口ニ銷落ス」という時の推移にともなう自然現象に対する単なる感傷や寂寥を吐露しているの

ではない。

それは左遷に対する悔恨の念や憤懣^{ふんまん}やる方^{かた}ない心情をいやすものの消失を包含^{ほうがん}していたのである。とすると「何^{なに}ヲ用^{もち}テカ遠客^{えんきやく}ヲ慰^{なぐさ}メン」の句の趣意^{しゆい}の重みを痛切に感じる。

したがって、柳宗元の描く自然は、単なる目を喜^{よろこ}ばせる自然物としてのみ存在するのではなくて、かれの境遇が生み出す鋭敏な心象風景としてユニークな妙味をただよわせているといえよう。

『論語』の顔淵篇に、「死生有命、富貴在天（死生命^{しせいめい}有り、富貴天ニ在リ）」とある。——人の生死や富貴は天命によるもので、人の力^{ちから}ではどうにもならないというが、そこから「命^{めい}ヲ知^しル者ハ天^{てん}ヲ怨^{うら}マズ」とか「知者^{ちしや}ハ惑^{まど}ワズ」といった言葉が意味をもってくる。——しかしながら、柳宗元の場合は逆に、恐らく「天^{てん}ヲ怨^{うら}ミ」、「惑^{まど}ウ」たところに詩興^{しきう}が涌^わいて来たと思われるだけに、流謫^{るたく}の境遇がひとしお哀^{あは}れ深く、うら悲しいものを感じてならぬ。

平成十四年十月十五日・脱稿

参考資料

本稿を草するにあたって、次の資料を引用し参照した。

- (一) 『插图本中国文学史二』・鄭振鐸著（商務印書館）
- (二) 『中国文学史二』・游国恩・王起・蕭涤非・季鎮淮・費振剛主編（人民文学出版社）
- (三) 『三体詩』中国古典選・村上哲見著（朝日新聞社）
- (四) 『唐詩選』新釈漢文大系19目加田誠著（明治書院）
- (五) 『唐詩三百首詳解』田部井文雄著（大修館書店）
- (六) 『韓愈II』韓昌黎文集第三十一卷・第三十二卷・世界古典文学全集・清水茂訳（筑摩書房）

- (七) 『唐宋八大家讀本二』 71新釈漢文大系・星川清孝著 (明治書院)
(八) 『柳宗元集』 第四冊古今詩第四十二卷・第四十三卷 (中華書局)